遺伝子を用いた新たな外来魚の駆除手法の開発について

岡本裕之・栗田潤・山口寿哉・奥宏海・正岡哲治（水研センター増養殖研）
藤原篤志（水研センター中央水研）、河村功一（三重大学）

平成 26 年度より開始した、遺伝子を用いた新たな外来魚の駆除手法の基盤開発研究について紹介する。本研究は、環境研究総合推進費の新規研究課題「遺伝子編集技術を用いた不妊化魚による外来魚の根絶を目的とした遺伝子制圧技術の基盤開発」で実施している。対象魚種はブルーギルであるが、本駆除手法の基本的な考え方はブルーギルに限らず、ほ乳類やは虫類、昆虫、植物など多くの侵略的生物種に応用できるものである。したがって、将来的にはオオクチバス、コクチバスなど他の魚種にも応用できるものと考えている。

本発表では、当研究の概要を紹介し、内水面漁業、行政、試験研究機関の方々や、学生、釣り人、市民団体などの一般の皆様から、本手法の疑問点や外来魚駆除の現場からのコメントなど率直なご意見や現場からの貴重な情報等を頂き、将来実りある駆除技術となるように議論を深めたいと考えている。

本研究は、環境省「環境研究総合推進費」の援助を受けて実施している。

(参照)http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/suishin/kadai/new_project/pdf/4-1408.pdf